

大津留 厚著

『捕虜が働くとき』

——第一次世界大戦・総力戦の狭間で——

(レクチャー 第一次世界大戦を考える)

人文書院 二〇一三・五刊

四六 一四二頁 一六〇〇円

今からちょうど一〇〇年前に勃発した第一次世界大戦は、参戦国が自国の人的・物的資源を総動員する形で遂行した、人類史上初の総力戦であった。だが、こと労働に関しては、純粹に自国民だけの動員がなされたわけではない。戦争で不足した男性労働力を補うためには、「銃後」の女性とともに、敵国兵士である捕虜の動員が必要とされたのである。

しかしながら、第一次世界大戦における捕虜の労働という問題は、総力戦体制を一国史的に把握する議論のなかで、いつのまにか忘れ去られてしまった。本書はそうした問題を、国家と捕虜兵双方の視点から丹念に掘り起こした、実証的歴史研究である。

叙述の中心は、著者が長年にわたりフィールドとしてきたオーストリア＝ハンガリーに置かれる。そこでは、大戦中に約二〇〇万の自国兵士が捕虜として失われ、それと同数の敵国兵士が捕虜として收容された。前者はロシア各地に收容されたオーストリア＝ハンガリー捕虜兵であり、後者はオーストリア＝ハンガリーに收容されたロシア人、イタリア人、セルビア人捕虜兵であった。

大戦を通じた捕虜の総数が八〇〇万から九〇〇万であるから、彼らは実にその半数近くを占めていたことになる。そうした背景には、膠着状態に陥った英仏独の戦線に比べて、頻繁に移動を繰り返す塹壕戦線の方が捕虜を生みやすい、という事情があった。

捕虜兵の扱いについては、塹壕ともにハーグ陸戦条約（一八九九年締結、一九〇七年改定）を参照し、形式上は人道を重んじていた。しかし、実際には民族ごとで待遇の違いが存在したし、また收容所の環境も劣悪なことが多かった。

そうしたなか、捕虜兵を收容所建設や農業に動員する動きが、早くも一九一四年から開始される。そしてこの動きは、戦争が長期化するにつれて本格化していった。特にオーストリア＝ハンガリーでは、捕虜の雇用の際に際する金銭的負担が軍と雇用者の間で明確化され、雇用のハードルが大幅に引き下げられた。かくして大量の捕虜兵が動員され、その労働環境は悪化の一途を辿った。

收容所を離れ、各地を転々としながら労働に従事する労働部隊からは、過酷な環境に耐えかねて逃亡をはかる者が相次いだ。オーストリア＝ハンガリーはこれに対し、懲罰として強制労働を課したほか、一九一七年に監査委員会を設置し、捕虜への監視の目を強めた。著者はその報告書から、捕虜と現地女性との「交際」が感染症の増加とからんで危険視された点や、捕虜をとりまく状況を監視側さえ苦痛に感じていた点など、興味深い事実を明らかにしている。

著者は最後に、日本で捕虜となったケースにも言及しながら、第一次世界大戦下の捕虜兵に無数の「戦時」があったことを確認

する。そして彼らの労働経験の解明が、第一次世界大戦、ひいては現在まで続く戦争全般の再考につながると結論づける。数々の証言を駆使し、働く捕虜の生きた姿を描いた本書は、今回間違いなくその端緒を拓いた。開戦一〇〇周年を迎えるにふさわしい一冊といえよう。

(今井宏昌)